

e-Learning 教材における Reading 指導法

— ALC Net Academy: リーディング力強化コースを用いた実践授業 —

柏原郁子*

A Study of Effective English Teaching methods with e-Learning material
: ALC Net Academy

Ikuko Kashiwabara

要旨

大阪電気通信大学では2004年よりアルク社が制作したe-LearningシステムALC Net Academyを導入した。全国で200校程の教育機関において採用実績のあるコンピューターを利用した英語学習プログラムであるが、十分とは言えない設備や運営管理に関するノウハウの不足から当初期待されていた効果を上げることなく、放置されるに等しいケースが少なくないのは残念でならない。

本実践報告書において、まず大阪電気通信大学がALC Net Academyを採択した後、場所、時間の制約なく学生が積極的にこのソフトウェアを活用できるよう、いかに教育設備環境を整えたのかを報告する。

また授業時にe-LearningシステムALC Net Academy（リーディング力強化コース）を使用する際、リーディング力を伸ばしたいと願う学生に対し、どのような指導をすれば効果的な授業が実践できるのか、筆者が実践した指導手順を示したい。

1. e-Learning教材とTOEIC

大学でカセットテープが利用できる教室で50人の学生を前に英会話の授業を行うとき、個々の学生のレベルに応じた授業展開が果たして可能であろうか。各学生がもう一度聞きたいと思った教材内容を、瞬時にもう一度聴ける環境が与えられるだろうか。学生のレベルにあった速度で英文を自由に聴けるだろうか。答えは否である。

パソコンを利用して学習するe-LearningシステムALC Net Academyは、上にあげた難題を全

* 大阪電気通信大学工学部人間科学研究センター講師

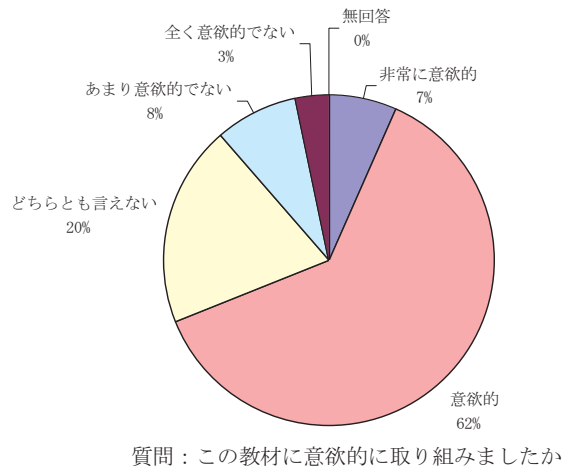
て解決してくれる。e-Learning教材が現在多くの教育機関で受け入れられつつあるのも、現在、英語運用能力を計る目安としてTOEICの得点が利用される風潮にあることが原因の一つとしてあげられるだろう。ある大学においては、学生全員にTOEICの受験を義務づけているし、またエクステンションセンターのような外郭組織において資格支援科目としてTOEIC講座を開講している大学も多く、今や大学の現場でTOEICを抜きにして英語教育を語れないかのような雰囲気漂っているのを否めない。就職活動に必要なエントリーカードにはTOEICの得点を記載する箇所があり、ある一定の得点を取得していなければ就職試験の一次試験も受験できないという厳しい現実には学生は直面する事になる。大阪電気通信大学においても、学生が就職活動をする際にTOEICの得点が足を引っ張る事にならないためにも、学生のTOEICの取得得点の向上を図る事が急務となっている。

TOEICテストはリスニング問題、文法問題、長文問題等200問の問題を2時間で解かねばならない過酷な試験である。単純計算して一分間に1.6問を解答する事になる。そこで数多くの問題を素早く処理し、正解を得る為の特別な訓練が必要となる。短時間で矢継ぎ早に問題を処理する能力がすなわち語学力を意味する訳ではないが、世の風潮に眉をひそめつつも学生諸君に実社会でのキャリア獲得の為の武器を与えるべく手を尽くすのが語学教員の務めであろう。TOEICで高得点を目指すという目的に特化したソフトウェアによる自主学習は味気のない苦行となりがちで、大半の学生は学習継続の意欲を失う。その結果高いコストをかけて導入したプログラムもいつか忘れ去られ放置されると言う冒頭で述べた事態と相成る。もし教員の工夫によってTOEIC対策の学習が、英語を実際に使いこなす為の訓練としても役立つものとなり、学生がその効果を実感できれば、強力なモチベーションとなるはずである。このような目的を遂げる為に、筆者はALC Net Academyを利用したReading指導手順を考案し、大学の授業の場で実践した。以下にALC Net Academy導入からe-Learningを利用しいかに効果的なReading指導法を行ったのか詳細を報告したい。

2-1. ALC Net Academy導入と効果的な教育環境の整備

大阪電気通信大学では2004年ALC Net Academyを導入し、前期授業終了時に行ったアンケートの「この教材に意欲的に取り組みましたか」という質問に対し、学生から次のような回答があった【図1】¹⁾。

1) 筆者担当の英語特別演習II (15名)、そして本学、草本康司郎先生担当の実用英語I (46名)の合計61名のアンケートの集計結果である



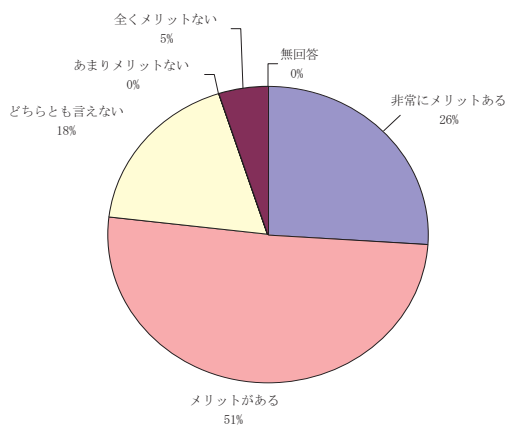
【図1】

入学当初から英語に苦手意識を持っている学生が多く存在する事を考えると、この結果は非常に嬉しい。このような結果を生むために大学側がいかに効果的な教育環境を整えたかを具体的に述べる。

ALC Net Academyを導入する際、個人学習用として開発されたこのソフトはCALL教室、PC装備のあるLL教室および自由利用教室またはPC演習室などでの使用に限られるという制約が生じることになる。大阪電気通信大学の場合、PC利用可能な第1～5演習室、オーサリングルーム、クリエイションルーム、コミュニケーションルーム、デザインルームという7つの演習室を備えている。各演習室は電通大方式 (http://www.osakac.ac.jp/ecip/edstyle/oecu_method.pdf) と呼ばれる演習システムを構築しており、学生は一人一台のコンピューターを使用し、学生二人に一台設置されているモニタテレビには教員のコンピューター画面、特定の学生のコンピューター画面、書画カメラ、ビデオ・DVD映像など様々な映像が映し出され、このモニターを通して授業が行われるように工夫されている。また教員側からは教卓にあるモニターにおいて、各学生が演習している画面をチェックする事が出来るので学習の進行状況を把握し、的確な指導を行える環境にある。しかしながら、工学系の専門および演習授業が優先的に使用するために、希望時間帯に演習室を語学の授業として利用する事は難しい。さりとて個人学習用として演習室自由解放時のみの使用と位置づけると、希望時間に演習室が開いているとは限らず、演習室の稼働率が非常に高い場合はALC Net AcademyというソフトがPCに入っているだけで誰も利用出来ないと言う状況が生じる事は明らかである。

学生が時間的制約を感じずにALC Net Academyを利用できる状況を作るため、情報処理教育センターの協力のもと学内Lanでの配信とWeb上での学習が可能となるよう環境を整えた。Web上での使用が可能となると、学生は授業時間という枠にとらわれず、ALC Net Academy

に対応している学内でのPCで利用可能となる上、家庭での学習も可能となり、授業科目で英語関連科目を履修していない学生、そして語学を履修する機会も少なくなる大学院生もがe-Learningシステムを利用し英語学習ができるという点で画期的な試みだと言えよう。「学内だけでなく自宅でもこの教材を学習できる事にメリットを感じますか?」というアンケート質問項目に対し、【図2】のような結果が見られる。



質問：学内だけでなく自宅でもこの教材を学習できる事にメリットを感じますか？

【図2】

学生は自宅でe-Learningシステムを用いながら学習できるメリットがあると見なしているのが明らかだ。

2-2. 導入システムの周知方法

システムを導入し、いつでも使える環境を整えたところで、実際学生は学習するのか、という声が聞こえて来そうだが、どんな素晴らしい道具でも使わなければ全く意味がないのは当然である。

そこで学内にある全ての学科掲示板、就職課、教務課、情報処理教育センター、学習支援室前にある掲示板にシステム導入とALC Net Academyがどのようなソフトであるのか、どのようなPC環境が必要なのかを説明した文書を掲示し、なおかつ情報処理教育センターホームページ (<http://toeic.ecip.osakac.ac.jp>) 上にて利用上の注意点、アクセスする際必要なアカウントおよびパスワードの案内文書、学習前のパソコンの設定の仕方の文書そして導入したスタンダードコース、初級・中級コースのマニュアル等はダウンロードできるよう情報処理教育センターの手配にて準備した。紙ベースの説明および解説書等の準備も考えられるが、数千人数万人規模の学習者を対象にした場合、経費的にも運営的にも難しい。ホームページ上であれば学生は必要な情

報を必要に応じて入手できるという利点がある。

また周知の方法として、担当授業での学生への情報提供はもちろんの事、新入生ガイダンス時
を利用し、TOEICに関する情報提供そして2004年より導入されたALC Net Academyの概要説
明を行い、どのような環境で使用できるのかを口頭説明を行った。

口頭説明だけでは具体的にどんなもので、どのように英語学習が可能なのか知る由もない。そ
こで全学学生、教職員を対象とし、英語科と情処理教育センター共同主催「e-Learning システ
ムALC Net Academyオリエンテーション」を前期期間中計6回催し、参加者は約140名であっ
た。時間は90分とし、まずシステムの説明10分、次にソフトの内容、効果的な学習方法をデモン
ストレーションしながら説明し、その後実際に参加者に体験してもらう形式で行ったが、概ね好
評であった。これだけの準備作業で学内での周知度はかなり上がったと思われる。

3-1. ALC Net Academyの構成内容

それではALC Net Academyがどのように構成されているソフトなのか、また授業において
どのようにこのソフトを指導すれば、リーディング力が向上するのか詳細に記す事にする。

アカウント名とパスワードを入力すると「受講講座一覧」の画面【図3】となり、本学では
2004年4月の導入の際、学生は図にある講座全て受講できる状態でスタートした。スタンダード
コース+追加版Iはレベル診断テスト、リスニング力強化コース、リーディング力強化コース、

受講講座一覧

コース名	選択	講座名
スタンダードコース追加版 I	<input type="radio"/>	レベル診断テスト
	<input type="radio"/>	リスニング力強化コース
	<input checked="" type="radio"/>	リーディング力強化コース
	<input type="radio"/>	TOEIC(R)テスト演習コース
初級・中級コース	<input type="radio"/>	リスニング力強化コース(初級・中級)
	<input type="radio"/>	リーディング力強化コース(初級・中級)
	<input type="radio"/>	TOEIC(R)テスト演習コース(初級・中級)
	<input type="radio"/>	TOEIC(R)テストパート演習(初級・中級)
	<input type="radio"/>	中間テスト/修了テスト(初級・中級)

【図3】 ALC Net Academy: 受講講座一覧画面

TOEICテスト演習コースで構成されているが、レベル診断テストを受けなければ3つのコースが利用できない。コース全体を初回の授業で説明する際は、レベル診断テストを受けずとも利用可能な、初級・中級コースを用いながらガイダンスを行う事をお薦めする。

授業でスタンダードコースを利用する際はまず学生にレベル診断テストを受験してもらう事になる。レベル診断テストは語彙力診断とリスニング診断に分かれ、所要時間は約20-30分かかるので、授業終了時に中断する事のないよう時間配分には気をつけたいところだ。どちらから始める事も可能だが、所要時間が決まっているリスニング診断テストから始める方が授業の時間配分がしやすいだろう。リスニングを伴うので、PC教室の場合個別に利用できるヘッドセットを準備する必要がある。語彙テストでは結果により8段階で分かれており、利用開始時の語彙レベルが示されるのだが、この語彙力診断テストでは問題が難しく評価されるレベルが期待よりも低い学生が続出し、皆落胆著しいので、教材の問題の選択の目安にしか使わない事を告げておくが良いだろう。リスニング力診断テスト結果は5段階に分類されている。ここでのレベル判定は、学生の予想以上の判定の場合が多く、期待感を持って臨める雰囲気醸し出すのに一役買っていたようだ。このレベル診断テストは一回のみ受験可能であるので、あくまで開始時の英語力を診断するテストであり、講座受講後の英語力伸長度のレベル診断としては利用できないのが残念である。

ALC Net Academyスタンダードコースはリスニング力強化コース、リーディング力強化コース、TOEICテスト演習コースにわかれているが、本論考ではリーディング力強化コースの効果的指導法について詳細に記す事にし、リスニング力強化コースの指導法については拙稿を参照されたい²⁾。

3-2. リーディング力強化コースの効果的指導法

講座名: リーディング力強化コース 問題作成・解説(R51-60)

表示教材番号: 01 ~ 20 21 ~ 40 41 ~ 60 61 ~ 80

教材	学習日	選択	タイトル	レベル
01	2004/04/30	<input type="radio"/>	武術カンフーフューサー	★★★★
02	2004/04/30	<input type="radio"/>	電子メールの利便性	★★★
03	2004/04/30	<input type="radio"/>	ニュースグループでの情報交換	★★★★
04	2004/04/30	<input type="radio"/>	幼児と水	★★★★★
05	2004/04/30	<input type="radio"/>	生命と水	★★★
06	2004/04/30	<input type="radio"/>	太陽系惑星の軌道	★★★★
07	2004/04/30	<input type="radio"/>	太陽系惑星の大きさ	★★
08	2004/09/27	<input type="radio"/>	虹の正体	★★★
09	2004/04/30	<input type="radio"/>	グランドキャニオンの地理	★★
10	2004/04/30	<input type="radio"/>	学校教育と家庭教育	★★★

【図4】ALC Net Academy:リーディング力強化コースタイトル表示画面

2) 柏原郁子「e-Learning教材における効果的指導法 ALC Net Academy を用いた実践授業と学生による授業アンケート評価」『外国語教育フォーラム』第4号, 関西大学 (2005. 3)

リーディング力強化コースは80題から構成されている【図4】。タイトルからも推察されるようにテーマも様々であり、教材番号順に取り組む必要は全くなく、学生の興味あるもの、そしてレベル診断テストから判定された各自のレベル評価★～★★★★★を参照しながら自分にあったレベルの題材を選ぶ事が出来る。

一斉授業では学生一人一人が好きな題材を読む事は叶わないが、e-Learning教材では学生個人のレベルそして興味を反映できるのが大きなメリットであろう。

TOEICテストにおいてリスニングパートの得点が伸びないと言う相談と、リーディングパートが時間内に終える事が出来ないという相談を多く受けるのだが、ALC Net Academy リーディング力強化コースを利用しながら、リーディングの力を伸ばす指導法を紹介したい。

【指導手順】例： ALC Net Academyリーディング力強化コース教材20：

タイトル：「日本の正月」 レベル：★

Title：① Main Idea



【図5】ALC Net Academy: リーディング力強化コース教材20 Step 1 First Reading画面

学生は自分の興味のあるタイトルから教材を選ぶ事になるが、まず本文がどのような内容であるのか、大まかなアイデアを得る為に、日本語による説明文を読む【図5】。どういう文章を今から読もうとしているのか把握できるだけでも、読み進むスピードが随分違ってくる。

Step 1: First Reading

② 全体Speed Reading × 1回



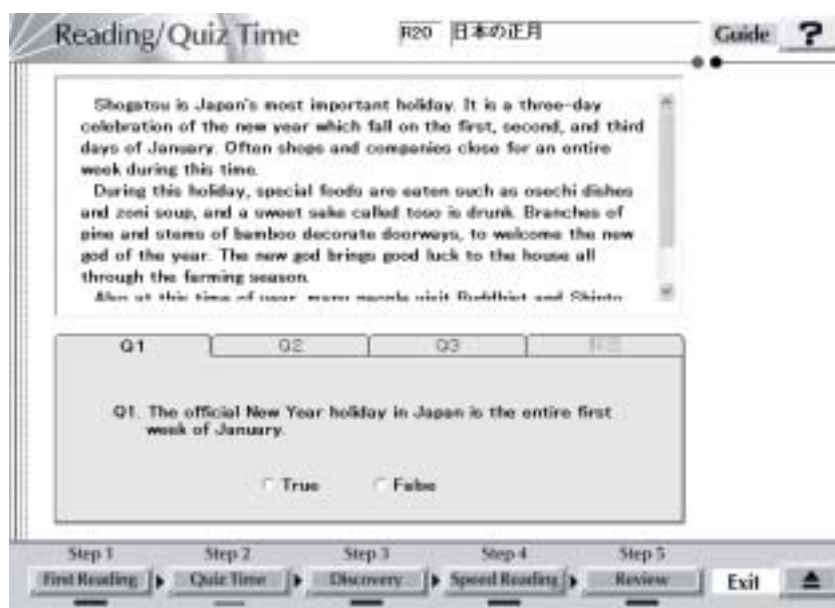
【図6】ALC Net Academy: リーディング力強化コース教材20 Step 1 First Reading画面

このステップ【図6】ではStartボタンを押すと全体の英文が示され、読み終わると同時にFinishボタンを押すと、文全体を読むのにかかった時間と一分間でどれだけのワード数が読み進められるかが提示される。ネイティブが普段喋るスピードが約200ワードであり、またTOEIC試験問題全体を時間内で終了する為には最低150ワード読めなければならない事を情報として与える。しかし今までスピードを計って読むこと自体を経験していない学生が殆どなので、100ワードを切ってしまう学生も出てくるが、英文を読めば読む程リーディングスピードは上がるという事を伝え励ます事も必要だろう。実際自分自身でリーディングスピードの伸長度を確認できれば、学習意欲が増すのは事実であるので、教員側で各ユニットのリーディングスピード記録表を作ることは有効である。

この段階で、分からない単語を辞書で引いたり、内容が把握できないので英文を逆戻りして読みだりする事のないよう伝えなければならない。英文を全て日本語に訳せることがつまり英語が出来ることだと思っている学生たちにとって最初は辛い作業であるのだが、日本語で新聞を読む際ざっと目を通して何が書かれているのか大体把握できるように、英文を速読しても内容把握できるようになるための訓練の一つである事を伝えておく。

Step 2: Quiz Time

③ True & False Questions × 1回



【図7】 ALC Net Academy: リーディング力強化コース教材20 Step 2 Quiz Time画面

分からない単語を飛ばしながら読み進めて時間を計ったとしても、内容を理解できているかどうか不安になるのは当然である。そこで大まかでも内容把握できているかどうかをこのTrue & False Questionで確かめる事が出来る【図7】。この問題を解く際Step 1:First Readingで読んだ英文の記憶を元に解いた方が効果的である。英語を読む事は問題の正解を得る事だと勘違いしている学生が多く、一文読むごとに問題に取りかかってしまい、問題に関係なさそうなところは飛ばし読みし、結局は何が書かれているのか分からなくなってしまっていることが多々ある。英文を参照せずにStep 2に取り組む事は、この習慣をなくすうえでも重要である。しかし、この画面では上半分に英文が掲載されてしまっているのでなるべく見ないように伝える必要がある。Unit 51-80では改善されており、英文on/offの切り替えができ、日本語の解説がついているので、どうして間違ったのか各自確認出来るようになっている。

Step 3: Discovery

④ Explain & Self Check



【図8】ALC Net Academy: リーディング力強化コース教材20 Step 3 Discovery 画面

手順②～③までは分からない単語も飛ばしながら、素早く読むことに重点を置いたが、このDiscovery【図8】では知らない単語も含め、内容理解につとめる。

単語を引くのが苦手だからといって、英文を読みながらいない学生も多いが、このソフトでは画面にあるよう単語帳が利用できるシステムになっている。電子辞書程使い勝手は良くないが、最低限の意味を知らせてくれるので、学習者にとって便利なツールである。単語の用法等詳しく調べたい場合には、電子辞書の持参を薦め、ハードディスク上に英和辞典が引ける状態であれば使用を奨励している。Web上の辞書ツールを使ってもらっても構わない。画面上にある単語帳は登録ボタンを押せば選択した単語が単語帳に登録されるようになっているので、覚えたい単語であれば単語帳一覧に加えていく。印刷機能もついているので、学習終了時に印刷し、ファイルとして残しておけばパソコンを起動しなくても復習できる。

どうしても日本語に訳さないと気が済まないという学生も中にはいるので、日本語に訳す場合は日本語をOFFの状態にした上で、各自ノートもしくはワープロソフトを立ち上げ訳文を書いてから、日本語をONにして訳文をチェックしてもらうことにしていたが、問題数をこなすに従って一文ずつ日本語に訳そうとする学生は減っていった。

このリーディング力強化コースに音声録音されていないのが欠点である。ネイティブの音声を真似る事で初めてネイティブのアクセント、リズムを習得し、ネイティブの話す速度で読める

ようになるのに、その機能がついていないのは残念ではない。LL機能がついている教室で授業を行っている場合、この段階で学生自身が音読する英文を録音するよう指導するのが有効であろう。その際音読にどれくらい時間がかかっているのか計ってみて、ネイティブが口語を話すスピード、一分間約200ワードをクリアしているのかどうか調べてみるのが良いだろう。手軽に扱えるICレコーダーでの録音も、自宅に帰ってから自分の発音をチェックできるので試してみたい媒体だ。

Step 4: Speed Reading

⑤ Translation



【図9】ALC Net Academy: リーディング力強化コース教材20 Step 4 Speed Reading 画面

Step 4に進みはするが、この⑤は前のStep 3に付随すると見なし、Speed Readingの練習には使用せず、Translationとして学習する。

Speed ReadingにあるPhrase 1タイプは【図9】にあるように、Nextボタンを押すごとに、纏まりあるPhraseごとに黒字で浮かび上がるように構成されている。ボタンを一回押すとShogatsu is Japan's most important holidayが提示され、二回押すとIt is a three-day celebration of the new year、三回押すとwhich fall on the first, second, and third days of Januaryと提示されていくのだが、ここでは一文をまとめて日本語に訳すのではなく、分詞構文、関係代名詞などのかかり具合を意識せず、頭から順番にどんどん日本語に置き換える練習に終始する。翻訳文はこなれた日本語ではないが、内容を理解するには十分であることがわかると、英文を読む際に、目が行ったり来たりということはない。最終的に日本語に置き換えず、英文をそのまま理解するのが目標であるのだが、構文を意識するあまり読み進めることができないという悩みは解消する。

⑥ Keyword Reading



【図10】ALC Net Academy: リーディング力強化コース教材20 Step 4 Speed Reading (Keyword Reading) 画面

④で実際音読したとしても一分間に200ワード以上の速度で音読できる学生が少ない事も事実である。そこでStep 4 ⑥からどうすれば速読出来るようになるのかを指導する。

このStep 4 Speed ReadingではPhrase 1, Phrase 2, Keyword, Pacedの4種類のReading Typeを選ぶ事が出来る。速読するよう指示されても、要領を得ない学生は、単語を一語一語吟味して読む習慣を捨てきれず、結局長時間かかって英文を読む事になっている。これを克服する為にまずKeywordのタイプを選んでもらう【図10】。このタイプはスピード設定が可能であり、TOEICを時間内で終了できる一分間150ワードに設定して開始する。画面にあるように、本文のKeywordのみが次々に浮かんでくるのを目で追う事を目標とする。Step 3で内容理解は既に十分であるので、英文を読む際、どの単語がKeywordとなり、読み落としてはいけないのか学習する事も可能である。またKeyword以外は読む必要もないので、読む早さは倍増する。このKeyword Reading においてできるだけスピードを上げ、目標としているワード数に達成する事がさほど困難でないことを実感してもらおうようにする。速読は訓練をしなければ身に付かない技術であるのだが、このKeyword Readingを80教材もこなすと必ず200ワード以上で読めるようになる。

⑦ Phrase 2 Reading



【図11】ALC Net Academy: リーディング力強化コース教材20 Step 4 Speed Reading Phrase 2 選択画面

Phraseの区切りは先にあげたPhrase 1 Readingと同じであるが、ここでは先にスピード設定が可能である。⑥ **Keyword Reading** でキーワードは既に識別できる事と、スピード感に慣れている事を考慮に入れると、スピード設定はかなり高めに設定しても十分に付いていけるであろう。Startボタンを押すと自動的に一分間に設定されたスピードでフレーズ単位に文字が現れるので目で追う事になるが、少し遅いと感じた時点で、キャンセルボタンを押し、スピード設定のワード数を上げてみるよう指示を出しておくこと、初回の3倍以上の早さで読みこなす事が出来る学生が殆どであった。

Step 5: Review

⑧ Filing



【図12】ALC Net Academy: リーディング力強化コース教材20 Step 5 Review画面

ここReview【図12】では英文、日本語が提示され、テキスト印刷機能も付いているので、英文、本文とも印刷してファイリングする事を勧めている。Web上でいつでも見る事は可能であるのだが、やはり学習したものを紙に印刷しファイリングするごとに増えていくのは気持ちのいいものである。単語帳も合わせて印刷しておけば、再び辞書を引かずとも復習可能である。

以上の指導手順でリーディング力の向上に努めれば、TOEIC試験問題を制限時間内に解き終え、満足のいく結果が得られる事は確実である。

4. まとめ

e-Learning教材を導入すれば学生個人が自分のペースに合わせて学習し、英語力もつくだろうと楽観視する人も少なからずいるだろう。しかし教育機関に導入されても、当初期待された程活用されることもなく、放置されるに等しいケースが少なからずあるのは、教材だけあったとしても学生のモチベーションは持続しないのだ。

授業においてe-Learning教材を用いる際も、教員の指導のある場合と、教員の指導のない場合とでは、学生のe-Learning教材に対する興味の高さ、取り組む熱意の高さに違いが出る事を、学生のアンケート結果を元に詳細に分析しているので拙稿³⁾を参考にして頂ければ幸いである。e-Learning教材を導入する事により、学生個人個人によりきめ細かい指導が必要であり、教員指導があればこそ学生の学習に対するモチベーションを保てることを理解して頂けるだろう。

今後授業においてリーディング力向上、そしてリスニング力向上に特化した教材としてALC Net Academyを活用し、実際のTOEICテストの得点の伸長度を調査し、学生個人個人の英語力に応じたきめ細かい指導を行うつもりである。

また授業においてe-Learning教材を使用する際、学生が高い関心を持ちながら、英語学習に取り組む為にはどのような指導法をとればよいのか公表していく。

3) 柏原郁子「e-Learning 教材における効果的指導法 ALC Net Academy を用いた実践授業と学生による授業アンケート評価」『外国語教育フォーラム』第4号、関西大学(2005.3)